

Collection Geste Francor n° 1-2

# ルイの戴冠

(Couronnement de Louis)

作者不詳

小栗栖等編

2006年7月1日

© 小栗栖等

ただし、非営利目的である限り、本書の一部または全てを、許可無く複製・配布することを著作権者は妨げない。

本書は随時加筆修正が行われる可能性がある。表紙の日付が若いほど版が新しい。最新版は下記のサイトで入手できる。

<http://www.eonet.ne.jp/~ogurisu/>

—本書は下記の手助けがなければ存在し得なかった—

本書の組版には、L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X<sub>2</sub><sub>ε</sub>（日本語版：奥村晴彦氏配布）を利用した。原稿作成の際には T<sub>E</sub>XShop を活用した。mendex がなければ、本書の索引作成には重労働を強いられただろう。

L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X<sub>2</sub><sub>ε</sub> の機能拡張に用いたパッケージについては、一つ一つ名前をあげることもできないが、babel にはぜひとも言及しておきたい。このパッケージがなければ、フランス語と日本語の混在には、絶望的な手作業を強いられたに違いない。

本書の執筆にあたっては、下記のサイトがなければ、作品中に言及される小都市の同定に膨大な時間を要したに違いない。

<http://www.wikipedia.org/>

これらの優れたフリーウェア・フリーフォント・フリー百科事典の開発および日本語化に携われた全ての人々に感謝する。

# 目次

I.	プロローグ (第 1-3 詩節、第 1-26 詩行) . . . . .	6
II.	ルイの戴冠 (第 4-14 詩節：第 27-271 詩行) . . . . .	7
	II.-1. 国王の資格 . . . . .	7
	II.-2. 王位篡奪者 . . . . .	9
	II.-3. ギヨームの出発 . . . . .	11
III.	ローマ巡礼 (第 15-34 詩節：第 272-1449 詩行) . . . . .	12
	III.-1. 異教徒軍の襲来 . . . . .	12
	III.-2. 教皇の和議申し入れ . . . . .	14
	III.-3. ギヨームとコルソルトの一騎討ち . . . . .	18
	III.-4. 捕虜の奪還とギヨームの結婚式 . . . . .	22
IV.	リシャール一族の反逆 (第 35-55 詩節：第 1450-2209 詩行)	25
	IV.-1. ルイの救出 . . . . .	25
	IV.-2. 反逆者の処罰 . . . . .	27
	IV.-3. リシャールの裏切り . . . . .	29
V.	ギ・ダルマーニュの反逆 (第 56-詩節：第 2210-詩行) . .	32
	V.-1. 使者の到来とローマ攻撃 . . . . .	32
	V.-2. ギヨームとギ・ダルマーニュの一騎討ち . . . . .	34
	V.-3. ローマでのルイの戴冠 . . . . .	37
VI.	エピローグ . . . . .	37



# ルイの戴冠

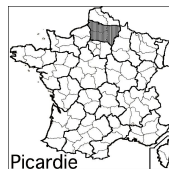
【校訂テキスト】 Anonyme, Ernest LANGLOIS, *Le Couronnement de Louis : chanson de geste publié d'après tous les manuscrits connus*, Firmin Didot et Cie, coll. "S.A.T.F.", 1988, Paris

Anonyme, Ernest LANGLOIS, *Le Couronnement de Louis : chanson de geste du XIIe siècle*, ISBN-2852030403, Honoré Champion, coll. "C.F.M.A.", 1925

【翻訳テキスト】 Anonyme, André LANLY, *Le Couronnement de Louis : chanson de geste du XIIe siècle*, Honoré Champion, coll. "C.F.M.A TRADUCTION", 1983

九つの写本（うち一つは断片）で今日に伝わる。2695 行の 10 音節詩行からなり、1131-1150 年頃、イル＝ド＝フランス地方、もしくはピカルディー地方で成立したと推測される\*<sup>1</sup>。

\*<sup>1</sup> 行数に関しては、Ernest Lnglois の校訂本では、という条件がつく。中世の作品は複数回の筆写を経て今日に伝わるのが普通である。写字生は、写し間違いを犯すこともあれば、作品に手を加えることさえもあった。したがって、作品の行数や内容は、多かれ少なかれ、写本ごとに異なるのが普通である。



## I. プロローグ (第 1-3 詩節、第 1-26 詩行)

皆様、御聞きください。皆様に神様のご加護がありますように。価値ある歴史、<sup>みやび</sup>雅やかにして、たえなる名歌をお聞きになるのが、お気に召しますでしょうか。<sup>しや</sup>卑しい旅芸人が、頼まれなければ一言も発さぬと自慢げに言う理由が、私にはわかりません。私は歌わずにはおれません。ルイ (Louis) のこと、そして、異教徒との戦いで<sup>しんさん</sup>辛酸を多いになめた、勇ましい短鼻のギヨーム (Guillaume) について。ギヨーム以上に優れた男について、誰かが歌えるとは、私には思えないからです。

Oiez, seignor, que Deus vos seit aidanz ! Plaist vos oïr d'une estoire vaillant Bone chançon, corteise et avenant ? Vilains jogleire ne sai por quei se vant Nul mot en die tresque on li comant. De Looïs ne lairai ne vos chant Et de Guillelme al Cort Nés le vaillant, Qui tant sofri sor sarrazine gent ; De meillor ome ne cuit que nuls vos chant. (vv. 1-9)

神はフランス (France) を最上の王国とし、最上の王シャルルマーニュ (Charlesmagne)<sup>\*2</sup>は、フランスの国土を拡大し続けた<sup>\*3</sup>。彼のものとならないような土地を神は作らなかったのである。

<sup>\*2</sup> カール大帝 (742/744-814) : 彼はゲルマン人の一部族、フランク族の王であったが、大まかに言えば、現在のドイツ・フランス・イタリアに相当する地域を支配し、800年にはローマ皇帝として戴冠した。シャルルマーニュはカロルス・マグヌス (Carolus Magnus) のフランス語化したもので、840年に、年代記作者ニタールによって使われ始めた表現である。

<sup>\*3</sup> ここでの「フランス」は今日的な意味でのフランスではなく、語源に遡って、フランキア (Francia) の意味で理解する必要がある。

フランスという今日の単語の語源となった、ラテン語のフランキアは、もともと、「フランク人 (ゲルマン人の一部族) の領土」の意味であり、シャルルマーニュの時代には、彼の帝国の全土を表した。ここでの「フランス」は、まさに、その意味である。だが、本作品成立当時においては、聞き手は無論のこと書き手にさえも (!)、この点はきわめて曖昧だった。ラテン語の、フランキア自体が、『フランス』の意味で用いられてもいたからである。とはいえ、その『フランス』が、今日的な意味のフランスよりも、国王の実質的な支配地域であったイル＝ド＝フランスのみを指すこともしばしばだったのである。

なお、国王は「フランク人たちの王 (rex Francorum)」という称号を、正式のものとして長らく使い続け、「フランス国王 (rex Francia)」という称号が用いられ始めたのは聖王ルイの時代、一貫して用いられるようになるのは、端麗王フィリップの時代

フランスの王冠を戴く者は、勇敢でなければならない。自分に害をなす者を、容赦なく倒さねばならない。さもなくば、彼が王冠を戴いたのは間違いだったと、歴史は断じることとなるのである。[1-3, 1-26]

## II. ルイの戴冠（第 4-14 詩節：第 27-271 詩行）

### II.-1. 国王の資格

エックス (Aix)<sup>\*4</sup>の教会が聖別された時、盛大な宮廷が開かれた<sup>\*5</sup>

裁きを求め、貧しい人々が宮廷に出向いたが、そこに訴え出て、きわめて正当な裁きを得られないような者は一人もなかった。

Por la justice la povre gent i vait ; Nuls ne s'i clame que tres bon dreit n'i ait. (vv. 31-32)

教会で、ローマ法王以下多数の聖職者たちが列席する中、シャルルマーニュは息子のルイに王位を譲りたいと提案する。臣下たちは異国の王の支

---

になってからだと言う。

[参考文献]

Claude GAUVARD, *La France du Moyen Âge, du Ve au XVe siècle*, ISBN2130542050, PUF, coll. "Quadrige", 1996, p. 328

Michèle PERRET, *Introduction à l'histoire de la langue française*, ISBN2718190329, SEDES, coll. "Campus", 1998, p. 39

<sup>\*4</sup> エックス・ラ・シャペル (Aix-la-Chapelle) : 現ドイツのアーヘン。シャルルマーニュの帝国の首都である。

<sup>\*5</sup> 固定した王宮で、貴族が舞踏会に明け暮れるような、近代的な宮廷を想像してはならない。宮廷は王が諸侯を集めて開く会議のことであり、いつも同じ場所で開かれるとは限らなかった。また、宮廷では、下記のように裁判も行われたのである。現在でも、宮廷 (cour) という単語が法廷をも意味するのはそのためである。

とはいえ、シャルルマーニュの時代に、実際に行われたのは、むしろ、諸侯の列席する会議で、その中で、裁判が行われることもあったのである。王と「庶民」が直接相対する可能性はきわめて低く、伯によって間接的に統治が行われた。「それ [辺境領や親王領] 以外のところでは、どこでも、伯 (Le comte) が王と王国の自由人 [奴隷でない臣民] を隔てる唯一のものであった」。Renée Mussot-Goulard, *Charlemagne*, P.U.F., "Que sais-je ?", 1984, ISBN2-13-038326-2, 1984, p. 42)

配を受けずに済むことを神に感謝して賛意を表す。そこで、シャルルは息子と呼んで言う。

大事な我が子よ。わしの言うことをよく聞くがよい。祭壇上の王冠を見よ。次の条件のもとで、これをお前にやるつもりだ。すなわち、悪行や放蕩<sup>ほうとう</sup>、罪悪を行わぬこと。誰にも裏切りを働かぬこと。孤児から封地<sup>ほうち</sup>\*6を奪わぬこと。もし、お前がその通りにするなら、わしは神を讃えよう。お前は王冠を戴き、王となるがよい。さもなくば、息子よ。王冠をそのままにせよ。わしは、お前がそれに手を触れることを許さぬ。

« Bels filz », dist il, « envers mei entendez : Vei la corone qui est desus l’altel : Par tel covent la te vueil je doner : Tort ne luxure ne pechié ne mener, Ne traïson vers nului ne ferez, Ne orfelin son fié ne li toldrez ; S’ensi le fais, j’en lorai Damedé : Pren la corone, si seras coronez ; O se ce non, filz, laissez la ester : Je vos defent que vos n’i adesez. (vv. 62-71)

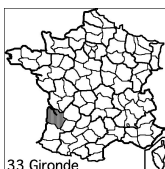
我が子ルイよ。ここに王冠がある。それを取れば、お前はローマ皇帝だ。十万人を軍勢として率い、武力をもって、ジロンド川 (la Gironde)\*7を越え、異教徒を打倒し、打ち負かして、彼らの土地を我々の領土に組み入れることができるのだ。そうしたいと望むのならば、わしはお前にこの王冠を授けよう。さもなければ、決して、王冠を戴いてはならぬ。

Filz Looïs, vei ici la corone : Se tu la prendz, emperere iés de Rome ; Tu puez en ost bien mener cent mille omes, Passer par force les aives de Gironde, Paiene gent craventer et confondre, Et la lor terre deis a la nostre joindre. S’ensi vuels faire, je te doins la corone ; O se ce non, ne la baillier tu onques (vv. 72-79)

[4-8, 27-79]

\*6 忠義と引き換えに、君主から与えられた土地。

\*7 実在の河川：フランス西部の、ガロンヌ (Garonne) 川とドルドーニ (Dordogne) 川の合流してできた三角江；北西に流れてビスクレ (Biscay) 湾に注ぐ。





## II.-2. 王位篡奪者

大事な我が息子よ。もし、お前が賄賂を受け取るのであれば、傲慢を<sup>はぐく</sup>育み、助長するのであれば、不品行を働き、罪悪を<sup>はぐく</sup>育むのであれば、孤児から封地を取り返し、未亡人から四ドゥニエ<sup>\*8</sup>でも奪うのであれば、神から与えられたこの王冠を、お前が戴くことを、息子ルイよ、わしは許さぬ。

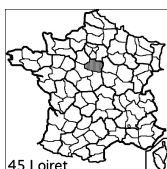
Se tu deis prendre, bels, filz, de fals loiers, Ne desmesure lever ne essalcier, Faire luxure ne alever pechié, Ne orfe enfant retolir le suen fié, Ne veve feme tolir quatre deniers, Ceste corone de Jesu la te vié, Filz Loois, que tu ne la baillier. (vv. 80-86)

しかし、未熟なルイは足を一步も踏み出せない。人々はその有様を見て涙を流すが、皇帝は憤激し、ルイを、自分の子供ではないと言い放ち、出家させると言い出す。それを押しとどめたのが、オルレアン (Orléans)<sup>\*9</sup>のエルナイス (Hernais) である。傲慢な彼は、自分が王冠を預かり、三年後までに、ルイが王位継承者に相応しく成長すれば、王冠を返還しようと言い出したのだ。シャルルはそれを了承する。

<sup>\*8</sup> 古い貨幣単位：1 リーブル (livre)=20 スー (sou)=240 ドゥニエ (denier) のという等式がなりたつ。

ここでの四ドゥニエは、明らかに、僅かな財産の意味である。しかし、現実には、カロリング朝の単純労働者は 50 スー (600 ドゥニエ) を稼ぐのに、三、四年かかった (ジャン・フロリ、『中世フランスの騎士』、新倉俊一訳、白水社、文庫クセジュ、1998 年、ISBN4-560-05806-7、p. 33)。年間、120-200 ドゥニエしか稼がない彼らにとって、4 ドゥニエがかなりの大金だったことは間違いない。事情は『ルイの戴冠』が成立した十二世紀でも、大きくは異ならなかつただろう。十三世紀までに鑄造された貨幣は、1 ドゥニエ銀貨が最高額面であり、小額貨幣は、オボル (obole :1/2 ドゥニエ)、ピクト (1/4 ドゥニエ) といった、ドゥニエ以下の額面しかもたなかつたからである (René Fédou, *Lexique historique du Moyen Âge*, Armand Colin, 1980, ISBN2-200-32196-1, p. 56)

<sup>\*9</sup> オルレアン：オルレアネ (Orléanais) 地方ロワレ (Loiret) 県の県庁所在地。



狩りを終え、森から帰って来たギヨームは<sup>\*10</sup>、そのことを甥のベルトラン (Bertran) から聞いて、急遽、教会に駆けつける。そして、エルナイスの首を刎ねようとするが、「その時、天上の栄えある神を思い出し、人を殺すことが重大な罪だということを思い出した。(Quant li remembre del glorios del ciel, Que d'ome ocire est trop mortels pechiez.) (vv. 126-127)」ギヨームは剣を鞘に収めると、

左手でエルナイスの髪をつかみ、右拳を振り上げると、首筋に振り下ろし、頸骨の中央を砕き、死んだ相手を足下の地面に転がした。

Le poing senestre li a meslé el chief, Halce le destre, enz el col li assiet : L'os de la gole li a par mi brisié ; Mort le trebuche a la terre a ses piez. (vv. 130-133)

ギヨームは死んだ相手の卑劣な裏切り行為を大声で責めた後、ちょっと懲らしめようとしたただけなのに、死んでしまったと言い放つ<sup>\*11</sup>。そして、祭壇上の王冠を見て取るや、それを手に取ると、ルイの頭に戴かせたのだった。

シャルルは再び国王の心得を繰り返し、教会に仕え、家来たちを大事にするように言う。かくして、ルイは王となり、宮廷は解散した。この五年後、シャルルマーニュはこの世を去ることとなるのである。

[9-11, 80-165]

<sup>\*10</sup> 戴冠という重要な行事の際、ギヨームが狩りに出かけているというのは、きわめて不自然である。しかし、武勲詩では、大切な行事に重要人物の招待を忘れる、という信じがたい不手際が、しばしば起こり、それが時には、事件や騒動の契機となる。単純に、物語の約束と見なしでも良いだろうが、苦労人が、なかなか報われないという世の中の不条理を表しているとも見ることが出来るだろう。

<sup>\*11</sup> 殺人ではなく、事故だと言いたいのであろう。教会の中で人を殺すのは宗教的には非常に罪深い行為である。

### II.-3. ギヨームの出発

宮殿に残ったシャルルはルイに、国王の名に恥じる行為を行わないことを、繰り返し、求める<sup>\*12</sup>。とりわけ、敵を容赦なく厳罰に処さねば、国王の権威が損なわれ、反乱に見舞われることになるかと警告する。さらに、

「それから、息子よ、もう一つ、知っておけ。お前が生きながらえたなら、このことが大いに役に立つだろう。すなわち、卑しい身分の者、徴税吏の息子、小役人の息子を相談相手とするでないぞ。あやつらは、金次第ですぐに裏切るからな。だが、誉れ高い戦士、ギヨームは別じゃ。勇猛なるエムリ・ド・ナルボンヌ (Aimeri de Narbonne) の息子にして、戦士ベルナル・ド・ブリュバン (Bernard de Bruabant) の弟なのだ。かの一族がお前を守り支えようとしてくれたならば、その奉公を、お前は完全に信頼しても良いのだ。」 幼少のルイは「私の首にかけて、お父様のおっしゃる通りです」と答えると、ギヨーム伯のところへやって来て、その足下にひれ伏した。伯は駆け寄って、ルイを立たせると、尋ねる。「殿下、何をお望みかな。」「神の御名において、慈悲と憐れみを、です。」

« Et altre chose te vueil, filz, acointier, Que se tu vis, il t'avra grant mestier : Que de vilain ne faces conseilier, Fill a prevost ne de fill a veier : Il boiserieient a petit por loier ; Mais de Guillelme le nobile guerrier, Fill Aimeri de Narbone le fier, Frere Bernart de Brubant le guerrier : Se il te vuelent maintenir et aidier, En lor servise te puez molt bien fier. » Respont li enfes : « Veir dites, par mon chief. » Il vint al conte, si li cheï as piez. Li cuens Guillelmes le corut redrecier ; Il li demande : « Dameisels, que requiers ? — En nom Deu, sire, et manaide et pitié. (vv. 204-213)

<sup>\*12</sup> 非常にくどい。特に繰り返されるのが、孤児と寡婦から土地や財産を奪わないことである。これは、とりわけ、封地の相続の問題と拘わっていると思われる。封地はもともと、君主に忠義を誓う代わりに家来（騎士）が受け取る土地のことである。したがって、原理上、その家来が死ねば、そうした契約関係は消滅し、封地は再び君主の手元に戻ることになる。女性や子供は騎士にはなれない以上、君主は忠義という封地の代価を受け取れないからである。しかし、こうした原則はやがて崩壊し始める。フランス北部や西部では十二世紀には、封地の分割や女性による相続さえ行われるようになったのである。

ギヨームはルイに後見と助力を約束した後で、シャルルマーニュに、<sup>いとまご</sup>暇乞いをする。十五年も前から誓っていたローマへの巡礼に旅立ちたいと言いだめたのである<sup>\*13</sup>。シャルルは不機嫌にはなったものの、六十名の騎士を供として、三十頭の駄馬に積んだ金銀を路銀として与える。

泣いて引き止めようとするルイを押しとどめ、必要な際には必ず助力に駆けつけることを約束すると、ギヨームは出発し、苦勞してアルプスを越え、ローマにたどり着いたのだった。[12-14, 166-271]

### III. ローマ巡礼 (第 15-34 詩節：第 272-1449 詩行)

#### III.-1. 異教徒軍の襲来

甥のベルトラン、ギエラン (Guielin) とともにローマに入ったギヨームは、食事を済ませると寢床に入った。

ギヨーム伯は眠り込む。とても疲れていたからだ。そして、一つの夢を見たが、それは彼を大いに<sup>しんかん</sup>震撼させるものだった。すなわち、ロシアの方から燃え盛る炎がやって来て、ローマを四方から焼き始めたのだ。そして、一頭の獵犬が、他の犬たちから離れて、全速力で走り寄って来た。ギヨームは茂った木の下にあったが、この獣には、大いに<sup>おびや</sup>脅かされた。というのも、犬が、前足の一本で、彼に、凄まじい一撃を与えたので、彼は、地面に倒れ伏しそうになったからだ。ギヨームは目覚め、神に加護を願った。

Li cuens se dort, qui molt par fu lassez. Sonja un songe dont molt

<sup>\*13</sup> 王位継承の混乱が静まらない、この時期に、十五年間放置した誓いを突如実行したいとギヨームが言い出すのは、一見、奇異でさえある。しかし、この急な出立の背景には、おそらく、教会内でエルナイス殺害したことがからんでいる。キリスト教の守護者でもあるギヨーム（モデルとなった人物の一人、ギヨーム・ド・ジェロヌ [8-9 世紀] は 1066 年に列聖されている）が、やむを得ないこととは言え、教会内で殺人に手を染めたのである。それは、中世の読み手・聞き手にとって、相当にショッキングなことだったに違いない。それゆえ、ギヨームが幼いルイを後に残し、巡礼を思い立ったとしても、中世の人々には当然と受け取られただろう。

fu esfrees : De vers Rossie vint uns feus embrasez, Qui esprenait Rome de trestoz lez ; Uns veltres vint corant toz abrivez ; Des autres est partiz et dessevrez ; Guillelmes iert soz un arbre ramé, De cele beste esteit toz esfrees ; Car de la poe li dona un colp tel Tot le feseit envers terre cliner. Li cuens s'esveille, si se comande a Dé. (vv. 288-298)

これは正夢だった<sup>\*14</sup>。というのも、異教徒のガラフル (Galafre) 王が、コルスルト (Corsolt) たちとともに遠征を開始し、シャプル (Chapres)<sup>\*15</sup>を陥落し、ゲフィエ (Guaifier) 王とその妻子以下、三万人を捕虜としたからだ。このままでは、彼らが首を刎ねられるのは避けられない。

翌朝、ギヨームは、教会でローマ教皇のミサを聞き、寄進を終えたが、その場に、二人の使者がやってきて、教皇にことの次第を伝える。

教皇はすぐにギヨームに事情を話し、助力を求める。しかし、彼の手勢はあまりに少ない。ベルトランは叔父の弱気を非難するが、ギヨームは、ルイに使者を送って、援軍を待つという以上の方策を考えつかない。だが、ベルトランの言う通り、使者はすぐにも敵の手に落ちて、殺されてしまふに違いない。教皇はギヨームに言う。

ここにおわす聖ペテロ<sup>\*16</sup>をご覧ください、彼こそが全ての魂の守り神。ギヨーム殿、この聖ペテロのため、今日、この武勇をなされたならば、生涯、毎日肉を食することができますし、好きなだけ、妻を娶ることもできますぞ<sup>\*17</sup>。裏切りを働かないように気をつけさえすれば、生涯、どんなにひどい罪を犯しても、許されないということはなく、ちゃんと、天国で暮らせますぞ。神は自らの友を御守りくださるからじゃ。聖ガブリエルが、(天

<sup>\*14</sup> 予知夢は武勲詩に頻発するわけではないが、非常に珍しいという訳でもない。『ロランの歌』では、ガヌロンの裏切りやバリガンの襲来に関して、シャルルが予知夢を見る。また、同作品の異本（パリ写本など）では、オードが恋人ロランの死を予知する夢を見る。

<sup>\*15</sup> 校訂者によれば、南イタリアのカプア (Capoua) のこと。

<sup>\*16</sup> ローマ教皇はイエスの十二使徒の一人、聖ペテロの後継者である。ローマカトリック教会の総本山サン・ピエトロ大聖堂は、聖ペテロの墓所の上に建てられていた。

<sup>\*17</sup> キリスト教では断食期間には肉を断つが、その肉断ちをしなくても良いというのである。また、一夫一妻もキリスト教の重要な掟であり、結婚は聖なる儀式、秘跡の一つであるが、その教えも無視して良いというのである。

国への) 道案内をしてください。<sup>\*18</sup>

Vei ci saint Pere, qui des anemes est garde ; Se por lui, sire, fais ui cest vasselage, Char puez mangier les jorz de ton eage, Et feme prendre tant come il t'iert corages ; Ne feras mais pechié qui tant seit aspres, Se tant puez faire de traïson te gardes, N'en seies quites en trestot ton eage. En paradis avras ton herberjage, Que nostre sire a ses bons amis garde ; Sainz Gabriels vos sera guionages. (vv. 388-397)

教皇の寛大さに感動したギヨームは、即座に、教皇の願いを聞き入れ、武装を始める。ローマ中からかき集められた兵力は三万人に達した。しかし、教皇は、無駄な人的損害を避けるため、ガラフル王のもとに赴き、軍勢の撤退を要求した。そのかわりに、教皇庁の財宝を一つ残らず引き渡すというのだ。だが、ガラフルはローマが自分が相続すべき財産だと言い張って引き下がらない。

やむを得ずローマへ引き返そうとする教皇に、ガラフルは、一騎討ちによる決着を提案する。すなわち、ローマ軍から一人、異教徒軍から一人、それぞれ代表 (champion) を出して戦わせ、その勝敗をもって、両軍の勝敗としようと言うのだ。ギヨームのことが頭に浮かんだ教皇は、この上なく喜んで、その提案を受け入れる。[15-18, 272-494]

### III.-2. 教皇の和議申し入れ

精神的な余裕ができた教皇は相手方の代表コルソルト王との接見を申し出る。だが、現れたのは、胴体だけで優に1トゥワーズ<sup>\*19</sup>という巨人

<sup>\*18</sup> 裏切り以外のどんな罪も許されるのだから、教皇の願いを聞き入れた時点で、ギヨームはエルナイス殺害の罪を免れることになる。また、ここで、教皇が許されない罪として裏切りをあげることにより、エルナイスが(たとえ教会の中であっても)即座に殺されなければならない存在だったということが強調されることにもなる。クーデタを企てた彼は反逆者=裏切り者 (traître) だからである。

<sup>\*19</sup> 長さの単位「1トゥワーズ (toise)=6 ピエ (pied)=72 プース (pouce)」という等式が成り立つ。1トゥワーズは、およそ、1.94メートルなので、大まかに言えば、トゥワーズ/ピエ/プースは日本の間/尺/寸に相当する。

だった。

おい、ちび。何が欲しいのだ。その頭の天辺を剃るのは、お前の宗教なのか。<sup>\*20</sup>

Petiz om, tu que quiers ? Est-ce tes ordenes que halt iés rooigniez ?  
(vv. 512-513)

教皇は自らを神の代理人だとし、財宝と引き換えに撤退を求めると、

コルソルト王は答えた。お前は事情をよくわかっておらぬな。俺の前で、神のことを話題にする危険を冒すとはな。そういう人間こそが一番私を苛立たせるのだ。天から落ちた雷が、俺の父を殺したからだ。父は丸焼けになり、誰も助けることができなかった。父を殺してしまった後、神はよく心得て振る舞ったものだ。天に昇ってしまい、こちらに戻ってこようとしなかったのだ。それで、俺の方は、後<sup>しもべ</sup>に続くことも、追いかけることもできなかった。だが、後<sup>しもべ</sup>になって、神の僕たちに復讐をしてやった。キリスト教の洗礼を受けた者たちを、三万人以上も破滅させてやった。火あぶりにしたり、水で責め殺したりしてやったのだ。俺は、天上に行って、神と戦うことはできぬが、地上では、奴<sup>しもべ</sup>の僕を一人たりとも逃しはしない。俺と神との間には、もう話し合うことなど何もない。地上は俺のものだから、空がやつのものであるということになるんだろうよ。<sup>\*21</sup>

Respont li reis : « N'iés pas bien enseigniez, Qui devant mei oses de Deu plaidier ; C'est l'om el mont qui plus m'a fait irier : Mon pere ocist une foldre del ciel ; Toz i fu ars, ne li pot on aidier. Quant Deus l'ot mort, si fist que enseigniez ; El ciel monta, ça ne volt repairier ; Je nel poeie sivre ne enchalcier, Mais de ses omes me sui je puis vengiez ; De cels qui furent levé et baptisié Ai fait destruire plus de trente miliers, Ardeir en feu et en aive neier ; Quant je la sus ne puis Deu guerreier, Nul de ses omes ne vueil ça jus laissier, Et je et Deus n'avons mais que plaidier : Meie est la terre et suens sera li ciels. (...) » (vv. 522-537)

<sup>\*20</sup> 相手に対する、コルソルトの奇妙な好奇心は、後ほど、ギヨームに対しても発揮される。

<sup>\*21</sup> コルソルトが神の存在を否定していないことに驚く読者もあるだろう。だが、少なくとも武勲詩の世界では、両宗教の信徒たちは、自分の神（神々）の方が優れている、あるいは、本物だとは言っても、相手の神（神々）が存在しないと決して言わない。つまり、異教徒だけでなく、キリスト教徒でさえも、多神教に近い考え方をしているのである。

教皇はがっかりし、付き添いの大司教と、神があゝの異教徒の足下で大地を割り、地獄送りにしないことが不思議だと言ひ合う。

キリスト教徒の陣地に帰還したローマ法王が事の次第を伝え、巨人コルソルト王の恐ろしさを言い立てる。すなわち、ロラン (Roland) とオリヴィエ (Olivier) 以下十二人衆 (les douze pairs)<sup>\*22</sup>であっても、あるいは、ギヨームの父親や兄弟でさえも、戦いを挑まないような相手だと述べたのである。が、ギヨームはひるまず、戦意満々である。

聖職者たちは聖ペテロの右腕を運び出してくると、それを飾っていた金銀の飾りをはぎ取り、その手首に接吻するよう、ギヨームに命じた<sup>\*23</sup>。次に、その腕を使って、ギヨームの兜や心臓に対して、十字を切った。ギヨームは馬にまたがり、決戦の場である丘の上に駆け上った。それを見た異教徒たちは、ギヨームを褒め讃えはするものの、コルソルトの敵ではないと言い切つてやまない。

天幕から出て来たガラフルはギヨームの姿を見て言う。

あやつが、<sup>りよりよく</sup> 膂力優れたコルソルトと戦うに違いない。だが、コルソルトに比べ、あやつは、貧弱で小粒。もし、すぐにでも、コルソルトがあやつを打ち破らねば、マホメットもカユ<sup>\*24</sup>もろくでなしだ。

Cil deit combatre vers Corsolt le membru, Mais vers lui est et chaitis et menuz. Pou i valdra Mahomez et Cahuz Se il n'est tost par rei Corsolt vencuz. (vv. 619-622)

巨人コルソルトの武具はどれも大きく重かった。彼以外の誰も、それらを身につけた後では、動くこともできなかつただろう。剣の長さは一

<sup>\*22</sup> シャルルマーニュの腹心の部下十二人をこう呼ぶ。『ロランの歌』では、ロラン以下全員が、ロンスヴォーで戦死する。

<sup>\*23</sup> 聖人などの遺体の一部は、聖遺物と呼ばれ、超自然の力を発揮すると信じられていた。そうした聖遺物は、ここでの「右腕」のように、貴金属もしくは貴石で飾り立てられることも少なくなかった。たとえば、コンクのサントゥ＝フォワ修道院に残る、聖女フォワの頭骨が治められた聖遺物像は、寄進された宝石類を満載した結果、豪華さを通り越して、むしろ、薄気味悪いものとなってしまつてほどである。

<sup>\*24</sup> どちらも、異教徒の崇める神。ちなみに、現実のイスラム教ではマホメットは神ではない。イスラム教の神はアラーだけである。



トゥワーズ (1.94m)、幅は一ピエ (32.4cm) もあった。彼の軍馬アリオン号 (Alion) は気性が荒く、知らない人間には近づくこともできなかった。

ついに陣出して来た巨人コルソルトを見て、ギヨームは言う。

「聖母マリアよ、これは、なんと優れた軍馬だろう。武勇優れた男の役立つ、たいそう立派な馬だ。あの馬に武具で傷をつけないようにしなければならぬぞ。私の剣があの馬を傷つけることがないよう、全てを司<sup>つかさど</sup>る神が、あの馬を御守りくださいますように。」こういう言葉は、臆病者には、用のないものだ。<sup>\*25</sup>

« Sainte Marie, com ci a bon destrier ! Tant par est bons por un prodome aidier Mei le covient des armes espargnier : Deus le guarisse, qui tot a a jugier, Que de m'espee ne le puisse empirier ! » De tel parole n'eüst coarz mestier. (vv. 677-682)

[19-21, 495-682]

<sup>\*25</sup> 強敵や激戦を眼前にして、行われる「危難の祈り」は、武勲詩ではおなじみのテーマである。だが、自分の身の安全を願うのが普通である。このように、敵の軍馬の安全を願うのは、例外的で、だからこそ、語り手は「こういう言葉は、臆病者には、用のないものだ」と言って、ギヨームの剛胆ぶりを讃えたのである。

ただし、この祈りは、次の引用の祈り（まさしく「危難の祈り」の名にふさわしい祈りであるが）と「反復」の関係にある。「反復」関係にある複数の出来事は、時間軸上に前後して並ぶものではなく、同じ一つの時間を占めるいわば、パラレルワールド（平行世界）である。したがって、「反復」では、複数の出来事の内容が、往々して、相矛盾するものともなり得る。ここでも、後に続く祈りでは、ギヨームは素直に自身の身の安全を願っている。

[参考文献]

・小栗栖等著、「『ロランの歌』の「反復」について」、『フランス語フランス文学研究』、日本フランス語フランス文学会、1頁～12頁、1992年

・小栗栖等著、「リシュネルの「反復」の概念再考」、『LUTECE』第22号、大阪市立大学フランス文学会発行、20頁～37頁、1992年

・小栗栖等著、『十二世紀のディスクールの概念』、駿河台出版社（平成9年度科学研究費補助金、「研究成果促進費」（一般学術書）による出版）、大阪市立大学大学院博士号（文学）第3192号取得論文、1998年

前二編の論文は、下記のサイトでダウンロードできる。

<http://www.eonet.ne.jp/~ogurisu/>

## III.-3. ギヨームとコルソルトの一騎討ち

敵が近づいてくるのを見たギヨームは祈り始める。天地創造、アダムとイヴの楽園追放、カインのアベル殺し、ノアの方舟<sup>はこぶね</sup>、マリアの処女懐胎、聖女アナスタズィアの両手復活の奇跡、東方三博士の来訪、ヘロデ王の幼児大虐殺、イエスの苦行と悪魔による誘惑、イエルサラム入市、マグダラのマリアの告悔<sup>こっかい</sup>、ユダの裏切り、キリストの磔刑<sup>たっけい</sup>、執行人ロンギウス開眼の奇跡、ニコデムスとアリマタヤのヨセフによる、キリストの埋葬、キリストの復活、キリストによる地獄の解放を述べた後<sup>\*26</sup>、

以上のことが真実であるのと同じくらい確かに、偉大なる王、神よ、我が身を破滅から御守りください。私は、あの長身で頑健で逞しい悪魔と、ここで、戦わねばならないのです。聖母マリアよ、お願いです。御助けください。臆病風に吹かれた私が、卑怯な真似をして、我が一族を非難にさらすことなど、決してないように。

Si com c'est veir, bels reis de majesté, Defent mon cors, que ne seie afolez. Ci dei combatre encontre cest malfé, Qui tant est granz, parcreüz et membrez. Sainte Marie, s'il vos plaist, secorez, Par coardise ne face lascheté, Qu'a mon lignage ne seit ja reprové. (vv. 783-789)

近寄って来たコルソルトは言う。

なあ、フランス人よ、隠さずに教えてくれ。おまえは、そんなに長々と、誰に話しかけていたのだ。<sup>\*27</sup>

Di mei, Franceis, ne me seit pas celé A cui as tu si longement parlé? (vv. 793-794)

ギヨームはキリスト教の神に祈っていたのだと答える。すると、コルソルトは、自分の神々の方がずっと値打ちがあると言い、宗旨替えを求める

<sup>\*26</sup> 『旧約聖書』と『新約聖書』全体の要約といった感のあるこの祈りは、以下の引用部を含めて、95行 (vv. 695-789) にもわたる長大なものである。

<sup>\*27</sup> 教皇の剃髪に対するのと同様の、コルソルトの奇妙な好奇心である。相手を単なる殺戮の対象としか考えていないのであれば、これは、あり得ない好奇心ではないだろうか。しかし、何らかの結論を導き出すには、コルソルトの命が短すぎる。

が、あっさりと断られた。その勇ましさに感心した巨人は、名を尋ね、相手が多数の異教徒を殺戮したエムリの一族だと知るや、怒りをあらわにする。一方、ギヨームもキリスト教の神を侮られて黙ってはおれず、言い返す。

お前の信じる教えなど、全くの絵空事だ。というのも、たいていの人が知っている通り、マホメットは、全能なるイエスの預言者だったのだ。俗世で説教するために地上に降り立って、まず、最初にメッカにやって来たのだが、酔いに任せて、酒を飲み過ぎた。それで、情けないことに、豚に食われてしまったのだ。そんなやつを信じる者には、善意のかけらもありません。<sup>\*28</sup>

La toe lei torne tote a neient ; Que Mahomez, ce sevent plusors genz,  
Il fu profete Jesu omnipotent ; Si vint en terre par le mont preechant.  
Il vint a Meques trestot premierement, Mais il but trop par son enivrement,  
Puis le mangierent porcel vilainement. Qui en lui creit il n'a nul bon talent. (vv. 846-853)

この罵倒に怒りながらも、コルソルトは、再度、ギヨームに改宗をもちかけ、撥ね付けられる。コルソルトは心の中で、相手の度胸に感服する。しかし、ローマが誰のものかで、決裂は決定的なものとなる。もはや、戦いは避けられなかった。コルソルトはギヨームに言う。

さあ、お前にとっておきの便宜をはかってやろう。槍をとり、しっかりと防具を締めよ。私の盾に打ちかかるがよい。私は身じろぎもしないぞ。少々、お前の武勇のほどを、小男が戦場でどう戦うのかを、見てみたいのだ。

Or te ferai un molt bel avantage : Pren ton espié et si restreing tes armes,  
Fier m'en l'escu, ja n'en serai muables : Je vueil veoir un pou de ton barnage,  
Com petiz om puet ferir en bataille. (vv. 892-897)

好機を逃すまいとギヨームは馬を駆り、神に祈る仲間たちの見守る中、コルソルトに槍を突き立てた。内蔵に達する傷を負った巨人は、自分より小さい者を見くびり、手加減を加えたことを後悔する。

<sup>\*28</sup> イスラム教は、禁忌として、酒と豚肉を口にしない。それにかこつけて、マホメットを笑い者にした、ののしり言葉である。他の武勲詩作品にも見られる。

両者は激しい攻撃を交わし合う。危うく攻撃をかわしたギヨームは、再び祈り始める。アダムとイヴの楽園追放、マグダラのマリアの悔悟、ユダの裏切り、イエスの昇天、聖パウロの改宗、ヨナやダニエルの救出、モーゼの見た強い光、それらが真実であるのと同じくらい確かに、私の身を御守りください。

しかし、コルソルトはギヨームに挑発の言葉を投げかけ、

それから、自分のアラゴン産の軍馬を転回し、脇に吊るしていた剣を抜くと、力任せにギヨームに切り付け、鼻あてもろとも、兜を砕き、鎖帷子のフードを切り裂くと、額の髪を断ち切り、鼻の頭を切り落とした。そのため、気高い男、ギヨームは、多くの非難をあびたのだった。

Lors trestorna son destrier aragon, Et trait l'espee qui li pent al giron,  
Et fiert Guillelme par tel division Que le naselet et l'elme li desront.  
Trenche la coife de l'alberc fremillon, Et les chevels li trenche sor le front,  
Et de son nes abat le someron. Maint reprovier en ot puis li frans om. (vv. 1035-1042)

この一撃で馬を失ったギヨームは、立ち上がると、剣ジョウユーズ (Joyeuse) を抜き<sup>\*29</sup>、コルソルトに切り掛かるが、うまく、かわされる。一方、自らの激しい一撃で剣をはじき跳ばしてしまったコルソルトは、つちぼこ槌矛<sup>\*30</sup>でギヨームの盾を粉々にしてしまう。

大量の出血にも拘わらず、相手が戦意を失わないことにギヨームは驚いていた。相手の軍馬を殺して、体勢の不利を解消する方法もあったが、馬を無傷で手に入れたいギヨームは我慢していた。すると、コルソルトは、またしても、挑発的な言葉を吐き、馬上で前傾姿勢をとるや、ギヨームに

<sup>\*29</sup> ジョウユーズはもともとシャルルマーニュの剣であり、13世紀以降は、フランス諸王の聖別の儀式で用いられるようになった。しかし、そのジョウユーズは、実際には、10-12世紀の剣の部品のつぎはぎ細工で、おそらく、13世紀初頭、フィリップ・オーギュストの聖別のために作られたものである。(Jean Favier, *Dictionnaire de la France médiévale*, ISBN2213031398, Fayard, 1993, "Joyeuse" の項目)。

<sup>\*30</sup> 槌矛 (masse d'arme) : 金属製の一種の棍棒のようなもので、切断よりも破砕を目的に用いる。武具に関しては、下記の書物が図版が豊富で読み易い。

Claude FAGNEN, *Armement médiéval*, ISBN2904365400, Desclée de Brouwer, coll. "Rempart", 2005

攻撃を仕掛けて来た。眼前に差し出された頭に、ギヨームは、容赦なく切り付ける。兜を飾っていた宝石類が砕け落ち、鎖帷子の頭巾が断ち切られる。頭蓋に掌ほどの穴があいたコルソルトは、馬上に倒れ伏す。ギヨームは自分の盾を投げ捨て、コルソルトに駆け寄ると、相手の首を兜ごと切り落とした。

ローマに引き返して来たギヨームを、真っ先に、教皇が迎え接吻した。甥のベルトランたちは、大いにギヨームの身を案じ、怪我はないかと尋ねる。

彼は答えた。「大丈夫だ。少々鼻が短くなったことを除けばな。よくわかっているのだが、それが原因で、名前の方は長くなるのだ。」ギヨーム伯は、この時、自分自身の名付け親となった。「今後は、私を愛し、大事に思う人々は、フランス人であれ、ロンバルディア人であれ、皆、わたしのことを、こう呼ぶのだ。戦士、短鼻のギヨーム伯とな。」<sup>\*31</sup>

— Oie », fait il, « la merci Deu del ciel, Mais que mon nes ai un pou acorcié ; Bien sai mes nons en sera alongiez. » Li cuens meïsmes s'est iluec baptisiez : « Des or mais, qui mei aime et tient chier, Trestuit m'apelent, Franceis et Berruier, Conte Guillelme al Cort Nes le guerrier. » (vv. 1158-1164)

その日は夜を徹して、祝宴が催された。翌朝、ベルトランは一同に武装を呼びかける。敵の残党を掃討しようというのだ。市中に留まり休息をとってくれと言われたギヨームは、もちろん、それを拒む。[22-28, 683-1188]

<sup>\*31</sup> 正確には、「自分自身の名付け親となった」は「自分自身を洗礼した」である。ギヨームが、自分自身に「短鼻」というあだ名をつけたことを、洗礼の際、洗礼名が与えられることから、「自身を洗礼した」と表現したのである。

なお、「ロンバルディア人」のロンバルディアはイタリア北部の地域（現在ではミラノを州都とする州の名）を意味する。

## III.-4. 捕虜の奪還とギヨームの結婚式

異教徒の陣地では、ガラフル王が言う。

私の完敗だ。あんな (小さな) 男にコルソルトが倒された以上、あやつらが信じる神は、十分信じるに足るのだ。心して、すぐ私の天幕をたため。逃げるぞ。これ以上、何を待つことがあるうか。

Or ai je trop perdu, Quant par tel ome est Corsolz confonduz. Li deus qu'il creient deit bien estre creüz ; Gardez que tost seit mes tres destenduz : Fuions nos en, qu'atendrions nos plus ? (vv. 1191-1195)

逃げ出した異教徒を、キリスト教徒が追撃する。ギヨームの甥たち、ベルトラン、ギエラン、ゴージェの活躍も目覚ましかつたが、とりわけ、活躍したのは、やはり、ギヨーム自身であった。彼はガラフルを見つけるや、一騎討ちを挑み、王を落馬させる。

ギヨーム伯は非常に優れた騎士であった。眼前にガラフル王がひっくり返っているのが見えた。望むなら、すぐにでも、彼の首を切り落とせただろう。が、その時、王は慈悲と憐憫を求める声をあげた。「どうか、お前がギヨームならば、私を殺さずに、生け捕りにしてくれ。そうすれば、たっぷりと稼げるぞ<sup>\*32</sup> 強大な王ゲフィエをお前に返してやろう。彼とその娘、高貴なる妻、それに、三万の哀れな捕虜たちもな。もし、私が死んだら、彼らは首を刎ねられてしまうぞ。」勇猛な顔つきのギヨームは言った。「聖ドウニにかけて、そういうことならば、命を長らえさせねばならないな<sup>\*33</sup>。」

Li cuens Guillelmes fu molt bons chevaliers : Devant lui vit le rei tot embronchié ; Se il volsist ja li trenchast le chief, Quant cil li crie et manaide et pitié : « Ber, ne m'oci, quant tu Guillelmes iés, Mais vif me prend, molt i puez gaaaignier. Je te rendrai le riche rei Guaifier, Lui et sa fille et sa franche moillier, Et trente mile de chaitis prisoniers, Se je i muir, qui tuit perdront le chief. — Par saint Denis », dist li cuens al vis fier, « Por itel chose deis estre respitiez. » (vv. 1250-1261)

\*32 当時は、捕虜と引き換えに多額の身代金を受け取る習慣が現実にあった。

\*33 命乞いをする者を殺さないでおくのは、良き騎士の作法である。しかし、それは、通常、相手がキリスト教徒か、キリスト教への改宗を希望する者の場合である。ギ・ダレマーニュの配下の司令官の降伏を参照されたい (34 頁)

王が捕らえられたのを見て、異教徒たちは、テヴェレ河 (Tibre) に停泊させていた船に乗り込み、沖合に逃れてしまった。どうやって、捕虜を取り戻せばよいのかと尋ねるギヨームに、

ガラフル王は答えた。「馬鹿なことをおっしゃるな<sup>\*34</sup>。というのも、巡礼が祈りを捧げる十字架にかけて、あなたは、たったドゥニエの値打ちのものも、得ることはできないからです。その前に、私にキリスト教の洗礼を施してください。マホメットはもはや役立たずなのですから。

Respont li reis : « De folie plaidiez, Car, par la croiz que requierent palmier, Ja n'en avrez vaillant un sol denier Devant que seie levez et baptisiez, Que Mahomez ne me puet plus aidier. » (vv. 1278-1282)

---

<sup>\*34</sup> ガラフルのここでのセリフは、彼の改宗を予想外のものと前提しなければ、理解できない。「馬鹿なことをおっしゃるな」は、ガラフルの改宗よりも変心・裏切りを想起させるものだからである。また、これ以降、突然、先のセリフとは口調が変わり、丁寧な言葉で洗礼を求めるのは、彼の改宗がぎりぎりまで隠されていたことを際立たせてもいる。

実のところ、武勲詩では、予想外の出来事が起こることは非常に珍しい。物語の主要な筋立ては、多くの場合、語り手によって、何度も、予言されるからである（「ジョングルール（旅芸人の）予告」）。その意味で、語り手が予言しなかったガラフルの改宗は、一応、例外的な事態だと言えるだろう。

しかしながら、この「不意打ち」は、効果的なものとはとうてい言いがたい。というのも、これまで引用したガラフルのセリフ (16 頁, 22 頁) を思い起こせば、彼の改宗は、予想外どころか、ほとんど、論理的必然とさえ言えるからである。

したがって、物語内には、ガラフルの改宗に関して、矛盾した二つの傾向が併存していると言える。すなわち、「隠蔽 ⇒ 不意打ち」の傾向と「予言・予想 ⇒ 予定調和」の傾向である。

武勲詩作品が個人の手によって創り出されたものか、どうかという問題は別にしても、作品が複数の人々の手を経てきたのは間違いのない事実である。写本を書き写した写字生たちの中には、作品に新たな要素を付け加えたり、古い要素を削ったりするものも、存在した。そうした作品の改変＝成長過程において、一つ作品内に、相矛盾した複数の傾向が生じるというのは、十分にあり得ることであった。事実、写本によっては、「馬鹿なことをおっしゃるな」という言葉は、「巡礼が祈りを捧げる十字架にかけて」の後におかれており、ガラフルの変心・裏切りを想起させる効果を全く持たない。

このような細かな異同の積み重ねが、作品の雰囲気や、写本ごとに、どれほど変えてしまうかについては、下記の書物が興味深い。

Claude LACHET, *La « Prise d'Orange » ou la parodie courtoise d'une épopée*, ISBN2852030284, Honoré Champion, 1986

洗礼を受けたガラフル王は、洗礼名をそのままガラフルとし、今や、キリスト教徒となった。そのことを異教徒が知れば、捕虜の解放は到底望めない。王は自らを縛らせ、ティヴェル川に引き連れさせた。そして、自分を助けるために、捕虜を解放するよう、異教徒たちに求めた。

船から降ろされた捕虜たちは、皆、ぼろ切れを身にまとい、傷だらけだった。異教徒たちは、敗戦の腹いせに、彼らにひどい虐待を加えたのだった。ギヨームは、彼らに新しい衣服や帰国のための路銀を与えてやろうと、教皇に提案し、了承される。

ゲフィエ王は解放されたことをギヨームに感謝し、自分の領土の半分を与えるので、娘と結婚してほしいと提案する。教皇の勧めに従い、ギヨームは了承し、早速、結婚式が執り行われ、教皇はミサを執り行う。

そして、ギヨームは奥方を娶るために、指環を手にとった。と、その時、使者たちが彼の足下にやって来た。「神の愛徳にかけて、ギヨーム殿、どうか、お慈悲を。あなたはルイ様のことを、すっかり御忘れになっています。気高く勇敢な王、シャルルは崩御され、広大な領土がルイ様のものとなりました。ところが、裏切り者たちは、ルイ様を領土の外に追い出して、別の者、ルーアン (Rouan)<sup>\*35</sup>のリシャール (Richard) 公の息子に王冠を戴かせようとしているのです」

Et l'anel prist por la dame esposer, Quant li message li sont al pié alé :  
 « Merci, Guillelmes, por sainte charité, De Looïs vos est petit membré,  
 Que morz est Charles, li gentilz et li ber ; A Looïs sont les granz eritez.  
 Li traïtor l'en vuelent hors boter, Un altre rei vuelent coroner, Le fill  
 Richart de Roem la cité. (vv. 1392-1400)

教皇は、ローマ防衛をガラフル王に任せ、即座に、ルイのもとにかけつけるよう求め、それをギヨームは了解した。

\*35 フランス北西部、セーヌ＝マリタイム (Seine-Maritime) 県の県庁所在地で、オート＝ノルマディー (Haute-Normandie) 地域圏の中心都市で、セーヌ (Seine) 川に臨む商工業都市。





ギヨームは 顔<sup>かんばせ</sup> 美しい奥方に接吻した。奥方は、ギヨームに接吻をし、涙が止まらなかった。かくして、二人は別れたが、生涯再会することのない運命だったのだ。

Guillelmes baise la dame o le vis cler, Et ele lui, ne cesse de plorer.  
Par tel covent es les vos dessevrez Que ne se virent en trestot lor aé.  
(vv. 1413-1416)

教皇から千騎の手勢を与えられたギヨームは、苦勞してアルプスを越え、フランス国内に帰ってくる。[29-34, 1189-1449]

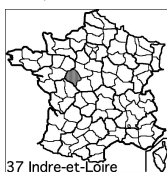
## IV. リシャール一族の反逆（第 35-55 詩節：第 1450-2209 詩行）

### IV.-1. ルイの救出

トゥール (Tours)<sup>\*36</sup>のサン・マルタン修道院 (Monastère de Saint-Martin) の地下納骨所に、心ある僧侶により、ルイがかくまわれていることを、通りすがりの巡礼から教えられたギヨームは、トゥールに向かう。そして、その途上、甥のガルダン (Gualdin) とサヴァリ (Savari) に出会う。彼らもルイ救援のため、トゥールに向かっていたのだ。

今や千二百騎の手勢を従えるギヨームは、千騎を四力所に分散して隠すと、残りの者たちだけを従えて、トゥールの城門の前にやって来た。ところが、リシャールの一族を装って門を開けさせようとする、門番は断固として拒否する。彼はリシャールの臣下でありながら、ルイに同情的だったのだ。相手がギヨームだと知るや、門番は、

<sup>\*36</sup> トゥール：フランス中西部のロワール (Loire) 川に臨む古都。トゥーレーヌ地方、アンドル-エ-ロワール (Indre-et-Loire) 県の県庁所在地。



宮殿の方に頭を向けて、手袋を手取るや、それを右手にもち、それから、大きく美しい声で、叫んだ。「リシャルよ、俺は、お前とお前の領国に、挑戦する。もはや、お前に仕えるつもりはない。君主に対する裏切りを働いた以上、お前が破滅することこそが正当で理にかなったことなのだ。<sup>\*37</sup>」

Vers le palais a tornee sa teste, Et prist un guant, sil mist en son poing destre, Puis s'escria a sa voiz halte et bele : « Je te desfi, Richarz, tei et ta terre : En ton servise ne vueil ore plus estre. Quant traïson vuels faire ne porquerre, Il est bien dreiz et raison que i perdes. » (vv. 1602-1608)

かくして、門が開かれた。ギヨームは隠していた兵たちも呼び寄せ、市中に集めると、都市の全ての城門を封鎖させ、誰も外に逃げ出せないようにする。門番はベルトランによって、騎士に叙任された。

ギヨームが、サン・マルタン修道院の礼拝堂で祈っていると、彼の顔を知っていた僧侶、ゴーティエ (Gautier) が近づいてきた。そして、修道院の高位聖職者を始めとする、八十人もの僧侶たちが、こぞって賄賂を受け取り、今日にも、ルイ王廃位の裁断を下そうとしていると述べた後、こう言う。

神かけて、お願いします。教会内での罪は、私が全てかぶりますから、彼らの首をお刳ねください。彼らは、皆、裏切り者にして、反逆者なのです。<sup>\*38</sup>

Prenez les testes, por Deu, je vos en pri : Tot le pechié del mostier pren sor mi, Car il sont tuit traïtor et failli. (vv. 1697-1699)

<sup>\*37</sup> 手袋は持ち主の人格を象徴する。これを持つことで、門番は自分の言葉が自分の全人格に関わる宣言だということを示したのである。門番の宣言は二つの内容をもつ。一つは、明確な挑戦である（挑戦なしに相手に攻撃を加えるのは、騎士道に反する卑怯な振る舞いである）。次に、君臣関係を解消である（門番が、リシャルの配下でありながら、ギヨームに協力するのは裏切り行為である）。むろん、本来は、リシャルの立ち会いのもとでなければ、こうした宣言は有効ではない。しかし、今の場合、まず、リシャルが自分の君主ルイを裏切っているので、自分のやり方も問題はない、と門番は言っているのである。ただし、後から判明する通り、この時点では、門番は単なる使用人で、騎士ではない。

<sup>\*38</sup> 聖職者を虐待したり、殺害したりするのは、非常に大きな罪である。しかも、教会施設内で殺せば、最悪である。

ギヨームは僧侶の勇ましさに笑い出し、ルイの居場所を尋ねる。僧侶はギヨームをその場に待たせて、ルイを迎えに行く。そして、礼拝堂の戸口でルイに、<sup>ひざまず</sup>跪いてギヨームの慈悲を乞うように言う。

堂内は暗く、ギヨームは、最初、自分の靴に接吻している相手が誰かわからなかった。

誉れ高いギヨーム伯は言った。「さあ、立つが良い。神のお造りになった誰であれ、たとえ、私をどんなに怒らせたとしても、私の足下に跪いて来たならば、私が喜んで許しを与えないようなことは決してないのだ。」

« Lieve tei, enfes », ce dist li cuens preisiez, « Deus ne fist ome qui tant m'ait corrocié, Se tant puet faire que il vieigne a mon pié, Ne li pardoinse de gré et volentiers. » (vv. 1734-1736)

しかし、相手がルイだと知ったギヨームは、即座に彼を抱き上げて言う。

神の御名において、(慈悲を求めて) 私の足にすがりつくよう、殿下に求めた奴は、私に、まんまといっぱい食わせたのです。というのも、誰にもまして、私は殿下をお助けしなければならないのですから。

En nom Deu, enfes, cil m'a mal engeignié Qui te rova a venir a mon pié, Car sor toz omes dei je ton cors aidier. (vv. 1744-1746)

[35-41, 1450-1758]

## IV.-2. 反逆者の処罰

ギヨームは臣下たちを呼び寄せて、ルイを裏切った聖職者たちの処分について尋ねる。極悪人と同様縛り首にするべきだ、というのが、その答えであった。しかし、ギヨームは罪を犯すのを恐れて、棍棒をふるい、聖職者たちを修道院からたたき出すに留めた。

次はリシャールの息子、アスランを処罰しなければならない。ギヨームは、甥のアレルム (Alleme) を使者に立て、臣従を誓うためにルイのもとに足を運ぶよう、アスランに求めた。が、アレルムの嘘を信じて、ギヨームにはほとんど手勢がないと信じたアスランは、断固、強硬姿勢を崩さな

い。その報告を受けたギヨームは、トゥール全市で強制武装解除を行う。すなわち、自分の手勢以外のものの武器を没収し、逆らう者の首をはねたのだ。つぎに、アスランのいる<sup>やかた</sup>館に行き、激しい戦闘の末、彼を捕らえた。それを見て、

ベルトランは言った。「おじさん、何を考えていらっしゃるのです。さあ、こやつ<sup>の</sup>頭に、王冠をかぶせてやりましょう。口まで流れる脳漿でできた王冠を。

Et dist Bertrans : « Que pensez vos, bels oncle ? Or li metons enz el chief tel corone Dont la cervelle li espande en la boche. » (vv. 1918-1920)

しかし、剣を振るおうとするベルトランをギヨームは押し留める。汚らしい裏切り者を、勇者の武器で殺すのが嫌だったのだ。彼は手近の柵から、杭を一本引き抜くと、それをアスランの頭頂に振り下ろした。血と脳漿を足下にまき散らしてアスランは死に、ギヨームはモン・ジョワ (Monjoie)<sup>\*39</sup>と<sup>かちどき</sup>勝鬨を上げる

つぎに、ギヨームは、アスランの父、リシャールがいると知って、教会の中に乗り込んだ。

教会の中にいるからと言って、ギヨームはリシャールを逃しはせず、左手で髪をわしづかみにするや、力任せに前のつんのめらせたので、リシャールは転んでしまった。そこで、ギヨームは右拳を振りかぶって、相手の首筋めがけて振り下ろし、リシャールを足下に転がしたが、リシャールは完全に気絶していたので、手足を切り落とされたとしても、手も足も動かすことはなかつただろう。

Nel lascia mie por ce qu'iert al mostier : Le poing senestre li a meslé el chief, Tant l'enclina que il l'a embronchié ; Halce le destre, enz el col li assiet ; Tot estordi l'abati a ses piez, Que toz les membres li peüst on trenchier Ne remuast ne les mains ne les piez. (vv. 1958-1964)

諸侯が頼み込んだので、ギヨームはリシャールと和解した。最初に、リシャールの方が息子の死に関し代償を求めないと宣言した。教会を出る前に、和平が結ばれ、両者は、多数の騎士が見守る中、接吻を交わしたのだっ

\*39 「我が歓喜」の意味で、フランス軍が戦闘の際に叫ぶ一種の決まり文句。

た。だが、この和解にはドゥニエの値打ちもなかった。というのも、この後、リシャールたちは、とある森の中で、鋼鉄の短剣で、ギヨームを殺害し、亡き者にしようとするからである。とはいえ、神はそれを見逃すことも、お許しになることもなかったのだ。<sup>\*40</sup>

Tant l'ont li conte et li baron preié Qu'il ont Richart a Guillelme apaié. La mort son fill clama quite premiers; La paiz fu faite ainz qu'issist del mostier. Si se baisierent veiant maint chevalier; Mais cele acorde ne valut un denier, Car puis le voldrent murdrir et esseillier Dedenz un bos a un coltel d'acier: Mais Deus nel volt sofrir ne otreier.  
(vv. 1972-1980)

リシャールとの和解で、全てが片付いたわけではなかった。ポワティエ (Poitier)<sup>\*41</sup> 領一帯に、反逆者たちが多数たむろしていたからである。

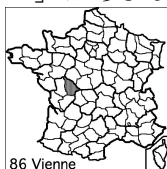
善良な修道院長ゴーティエに、ルイ王を託すと、三万余の兵とともにギヨームは出陣し、三年の年月をかけて、かの地を平定したのだった。[42-46, 1759-2010]

#### IV.-3. リシャールの裏切り

丸三年、一日も休むことなく、ギヨームは、戦い続け、ポワティエ領を征服した。つぎに、ボルドー (Bordeaux)<sup>\*42</sup> に遠征、当地のアマル

<sup>\*40</sup> 語り手の予言である。リシャールによる裏切り行為のみならず、それが失敗することまでもが、はっきりと示されているのを見ると、現代人と中世ヨーロッパの人々の考え方に、相当の違いがあることを感じざるをえない。

<sup>\*41</sup> 実在の地名：フランス中西部、ヴィエヌ (Vienne) 県の県庁所在地で、ポワトゥー-シャラント (Poitou-Charentes) 地域圏の中心都市；シャルルマーニュの祖父カール・マルテルが、732年、北上して来たイスラム教徒を阻止した「トゥール・ポワティエの戦い」はあまりにも有名である。



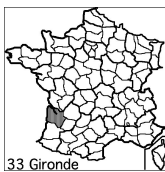
<sup>\*42</sup> ボルドー：フランス南西部の港市で、ジロンド (Gironde) 県の県庁所在地にして、アキテーヌ (Aquitaine) 地域圏の中心都市。

モンドウ (Amarmonde) 王をルイの家臣とし、ついで、ピエルラトゥウ (Pierrelate)<sup>\*43</sup>方面に転進して、カルタージュ (Cartage)<sup>\*44</sup>のダゴベール (Dagobert) をルイに従わせた。さらに、今度は、アナドール (Annadore)<sup>\*45</sup>に歩を進め、サン＝ジル (Saint-Gilles)<sup>\*46</sup>を攻めた。捕虜となった、かの地の支配者、ジュリアン (Julien) は、多額の人質を差し出して、和平を誓ったのだった。

ギヨーム伯は、兵たちに声をかけて、彼らの大多数にとっては、嬉しい言葉を述べた。「気高く、栄えある者たちよ。さあ、荷物をまとめ、おのおの、自分の故郷へ、自分の許婚者のもとへと帰るが良い。」

Li quens Guillelmes a sa gent apelee, Tel chose dist qui a plusors agreee : « Or al harneis, franche gent onoree, Si s'en ira chascuns en sa contree, A sa moillier qu'il avra esposee. » (vv. 2039-2043)

軍を解散したあと、ギヨームは手勢の大半をポワトゥウに残し、自身は、ブルターニュ沿岸地帯を巡視し、モン＝サン＝ミシェル (Mont-Saint-



<sup>\*43</sup> 校訂者によれば、「おそらく、ペララダ。ピレネゾリアンタル (Pyrenées-Orientales) 県、スペイン山脈上に位置する」。



<sup>\*44</sup> 実在の市：スペイン南東部の港市、カルタヘナのこと。

<sup>\*45</sup> 校訂者によれば、「おそらく、アンドラ (Andorre)」。

<sup>\*46</sup> サン＝ジル：フランス南部のガール (Gard) 県に所在。



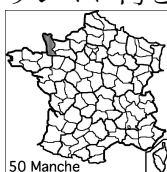
Michel)<sup>\*47</sup>に二日滞在し、コタンタン半島 (Cotentin)<sup>\*48</sup>に達すると、ようやく、ルイのもとへと引き返し始め、ルーアンまでやって来た。そこには、ギヨームが殺した反逆者アスランの父親、リシャルルの所領だった。

ギヨームがやって来たことを知ると、リシャルルは、和解には何の値打ちも認めず、早速、暗殺計画を練り、臣下とともに、彼の行動を監視し始めた。一方、何の警戒心もないギヨームは、森の近くで食事をとった後、疲労から眠り始めた家来たちを残し、二人の騎士だけを伴い、あたりを散策し始めた。が、好機到来と見たリシャルルが十五騎を引き連れやって来る。ギヨームは二人の家来に言う。

「なあ、どうしたら良いか教えてくれ。赤毛の<sup>\*49</sup>リシャルル公が、こちらに向かってくる。あやつは（反逆の）大きな代償を支払ったのだが、そのことで、私を恨んでいるのだ。誰もが知る通り、あやつの息子を殺したのだからな。だが、そうとはいえ、我々は和解した。トゥールの教会で、和平の誓いを交わしたのだ。」彼らは答えた。「あなたは何を恐れているのです。それよりも、橋のところまで馬を駆り、走らせて下さい。そして、善意と愛情を込めて、彼に挨拶するのです。もし、リシャルルが、あなたの言葉に、何か口答えしたなら、獅子の描かれた盾をおとりあれ。世界中の金と引き換えであったとしても、あなたを見捨てるようなことはいたしませんから。」ギヨームは、答えた。「御身たちに、感謝するぞ。」

« Baron », dist il, « dites quel le ferons. Ici nos vient li dus Richarz li ros, Et il me het de molt grant reençon : Son fill ocis, que por veir le set on ; Mais ne por quant acordé estions : La paiz fu faite enz el mostier de Tors. » Et cil respondent : « De quei le dotez vos ? Mais chevalchiez et poigniez tresqu'al pont, Sil saluez par bien et par amors ; S'il vos defent de riens vostre raison, Si vos tenez a l'escu a lion, Ne vos faldrons por

<sup>\*47</sup> モン＝サン＝ミシェル：フランス北西部ノルマンディー (Normandie) 地方マンシュ (Manche) 県の海岸近くの小島。その上に立ち並んだ修道院と旧市街，小島を擁するサンマロ湾を含め、1979年に世界遺産に登録された。



<sup>\*48</sup> ノルマンディー地方西端の半島

<sup>\*49</sup> 中世ヨーロッパにおいては、赤毛は裏切り者の象徴的特徴であった。

tot l'or de cest mont. » Respont Guillelmes : « Vostre merci, baron. »  
(vv. 2113-2125)

橋までやって来たギヨームはリシャールに挨拶し、和解のことに言及する。しかし、リシャールは聞く耳を持たず、息子を殺された恨みを述べ、ギヨームを八つ裂きにしてやると宣言する。かくして、十六対三の戦闘が始まった。が、最初に、ギヨームがリシャールに怪我を負わせ、落馬させてしまうと、残りの十五騎のうち、十騎は、瞬く間に殺され、負傷した残りの者たちは、その場を逃げ去ってしまった。リシャールは縛り上げられ、捕虜となった。

眠りから覚めたベルトランたちは、ギヨームから事の次第を聞いて、神に感謝する。[47-55, 2011-2209]

## V. ギ・ダルマーニュの反逆（第 56-詩節：第 2210-詩行）

### V.-1. 使者の到来とローマ攻撃

オルレアンに戻ったギヨームは、そこで、ルイと再会し、捕虜のリシャールを引き渡した。リシャールは塔に幽閉され、苦悩のうちに死んだ<sup>\*50</sup>。

さて、ギヨームは、体を休め、森や川縁<sup>かわべり</sup>に狩りをしに行くような生活ができると思った<sup>\*51</sup>。だが、そんなことは、彼が生きる限り、決して、実現しないだろう。ほら、彼のもとに、馬を駆って、二人の使者がやってきた。彼らはローマからやってきたのだが、馬をすっかり消耗させてしまっていた。

Or se cuida Guillelmes reposer, Vivre de bos et en riviere aler ;  
Mais ce n'iert ja tant com puisse durer. Es dous messages poignant toz

<sup>\*50</sup> リシャールは、たまたま、捕虜にされたのではない。彼を処刑せずに幽閉することにより、ギヨームは、和解を願った諸侯たちの顔を立てることができるのである。

<sup>\*51</sup> 狩猟は騎士階級の主要な娯楽の一つであった



abrivez ; De Rome vient, chevaux ont toz laissez (vv. 2223-2224)

ゲフィエもガラフルも教皇も亡くなってしまい、ギ・ダルマーニュ (Gui d'Almaine) が侵攻して来て、ローマを占拠してしまった。使者から、そう聞かされて、ルイ王は泣き出す。ギヨームは

ああ、情けなく、腰抜けで、<sup>ふぬ</sup>腑抜けの王よ。私は、キリスト教世界の誰からも、あなたを守り、支えていると考えていました。けれども、あなたに対し、皆が、これほどの憎しみを抱いてしまったとは。かくなる上は、あなたの望みがかなうまで、あなたへの忠義に、私の若さの全てを注ごうと思います。

Hé, povre reis, lasches et assotez, Je te cuidai maintenir et tensor  
Envers toz cels de la crestienté, Mais toz li monz t'a si coilli en hé En  
ton servise vueil ma jovente user Ainz que tu n'aies totes tes volentez.  
(vv. 2249-2254)

ルイ王とギヨームは各地に親書を送って兵を募り、五万の兵士とともに、苦勞してアルプスを越え、ローマ城壁のふもとまでやって来た。しかし、敵に阻まれ、市内に入ることはできず、城壁の外に天幕を張って野営する。ギヨームは、必要な品々を取り揃えるべく、近隣の一帯で略奪を行おうと、野営地を離れた<sup>\*52</sup>。

ギヨームの不在を付いて野営地に攻め込んで来た敵の先遣隊を前に、フランス勢は大混乱に陥る。ルイ王は天幕から天幕へと走り回って逃げ、ギヨームとベルトランの助けを求める。しかし、折よく帰還した略奪舞台と、野営地にいた部隊との挟み撃ちにより、敵の先遣隊千名は、全員殺さ

<sup>\*52</sup> 戦地で略奪を働き、糧食の類を集めるのは、当時の価値観では、ほとんど問題視されなかった。

「しかし、軍隊の他の者たち [身分の低い兵士たち] はどうやって養ったのだろうか。たいていの場合、歩兵たちが、現地での補給を許された。部隊の大部分を構成する荒くれ者たちは、百姓たちのあばら屋に押し寄せ、調達を行っても、恥じるところは一切無かった。途上、あらゆる抵抗の試みを蹴散らし、眼についたあらゆる物品を持ち去ったのだ。舞台が町中だったとしても、事情は何一つ変わらなかった。」  
(Claude FAGNEN, *Armement médiéval*, ISBN2904365400, Desclée de Brouwer, coll. "Rempart", 2005, pp. 103-104)

れるか、捕虜となった。先遣隊の司令官は、ギヨームによって、怪我を負わされ、辛うじて、馬の首に抱きついていてた。

ギヨームは剣を抜き、その首を刎ねようとしたが、その時、相手が慈悲を請い叫ぶ。「ああ、もし、御身がギヨームならば、私を殺さないでくれ。それよりも、生け捕りにしてくれ。たんまりと、稼ぐことができるぞ。たっぷり一ミュイ<sup>\*53</sup>の銀貨をやろう。」ギヨームは彼に近づいて行き、彼は、研ぎすまされた鋼の剣を差し出した。<sup>\*54</sup>

Traite a l'espee, volt li prendre le chief, Quant il li crie et manaide et pitié : « Ber, ne m'oci, se tu Guillelmes iés, Mais pren mei vif, molt i puez guaaignier : Je te donrai un grant mui de deniers. » Li cuens Guillelmes s'est de lui aprochiez, Et cil li rent le brant forbi d'acier. (vv. 2347-2353)

ギヨームはそれを聞き入れ、捕虜として、ルイに引き渡した。

[56-57, 2210-2361]

## V.-2. ギヨームとギ・ダルマーニュの一騎討ち

多数の兵を失ったギ・ダルマーニュは方針を変更する。使者を通じて、彼は、ルイに言う。

ギ・ダルマーニュは使者として私をお前のもとに送ったのだ。何を隠そう、彼は私を通じて、次のように求めている。すなわち、お前は、ローマにも、お前が持つ全ての相続財産にも、何の権利も持ちはしないのだということ。そして、そのお前が、傲慢にも、ローマを所有したいというのであれば、お前自身か、あるいは、お前の代わりに戦う者が、彼と一騎討ちを行わねばならないということだ。

Gui d'Alemaigne m'enveie por message ; Par mei vos mande, ne sai

<sup>\*53</sup> 容量の単位だが、地域、時代、さらには計量対象により、異なった量を意味した。たとえば、1330年頃、パリでは一ミュイの澱なしワインは119リットル、澱まじりのワインで134リットルだったが、サン＝ドニでは、澱まじりのワイン281リットルが一ミュイだった。(Jean Favier, *Dictionnaire de la France médiévale*, p. 672)

<sup>\*54</sup> ガラフル王の降伏(23頁)とほぼ同じ表現が用いられていることに注意されたい。武勳詩には、こうした類似表現を繰り返し用いることが非常に多い。

que vos celasse, N'as dreit en Rome ne en tot l'eritage. Et se le vuels  
aveir par ton oltrage, Encontre lui t'en convient a combatre. O chevalier  
qui por ton cors le face. (vv. 2390-2395)

ルイは臣下たちに自分の代わりに戦ってくれる者はないかと尋ねる。しかし、皆俯<sup>うつむ</sup>いてしまう。それを見て、ルイが涙を流し始めたところへ、略奪から帰還したギヨームが現れた。

そこで、臣下一同が聞いている前で、彼はルイに叫んだ。「ああ、哀れな王よ。神が御身に罰を下さいますように。なぜ、泣いているのです。誰が、あなたに災いをなしたのですか。

Lors li escrie, oiant tot le barnage : « Hé! Povres reis, li cors Deu mal te face! Por quei plorez? Qui vos a fait damage? » (vv. 2419-2421)

事情を知った彼は言う。

王よ、神が御身に罰を下さいますように。あなたへの忠義のゆえに、私はすでに二十四もの一騎討ちをいたしたのです。今回に限り、私があなただを見捨てるとでも思ったのですか。神かけて、断じて、見捨てはしません。この一騎討ち、私が引き受けます。あなたのフランス人たちは、皆、銅貨ほどの役にも立たないのですから。

— Reis », dist Guillelmes, « li cors Deu mal te face! Por vostre amor en ai fait vint et quatre : Cuidiez vos donc que por ceste vos faille? Nenil, par Deu! Je ferai la bataille. Tuit vo Franceis ne valent pas meaille. » (vv. 2429-2433)

ベルトランが立ち上がり、一騎討ちを自分に任せて欲しいと言うが、ギヨームはそれを拒絶する。

一騎討ちの提案が受諾され、ギヨームが代表となったことを知ると、ギ・ダルマーニュは早速武装し、決闘の場に現れた。それを見たギヨームも、武装し、敵の待つ丘に駆け上る。相手の求めに応じて名乗りを上げた後、ギヨームは主張する。

法に照らして、ローマはサン＝ドニ (Saint-Denis) の王のものなのだ。そして、私こそが、この丘の上で、ローマの領有に関して、アラブ人コルソルトと一騎討ちを行ったのだ。

Par dreit est Rome al rei de Saint Denis, Et je meïsmes une bataille  
en fis, En som cest tertre, a Corsolt l'Arabi, (vv. 2521-2523)

すると、ギ・ダルマーニュは同盟を結び、二人でローマを統治しようともちかける。もちろん、ギヨームは拒む。

私は決して、正統な君主を裏切るつもりはない。手足をもがれようとも、そんなことを、私はしないぞ。<sup>\*55</sup>

Je ne vueil mie mon dreit seignor traïr, Je nel fereie por les membres  
tolir. (vv. 2535-2536)

ついに、一騎討ちが始まった。両者は互いに馬を駆り、その勢いを借りて、相手を槍で突く。盾が砕け、槍も砕け、両者は真っ向から衝突し、人馬もろとも転倒する。ギヨームは立ち上がるや、シャルルマーニュから受け継いだ名剣ジョウユーズ (Joyeuse) を抜き、ギ・ダルマーニュに打ってかかると、骨があらわになるほど、腰に斬りつけた。一方、ギ・ダルマーニュは、それでも、戦意を失わず、ギヨームに激しい一撃を加えたが、剣が根元から砕け散ってしまった。そこで、ギヨームは剣を振りかぶると、敵の兜に斬りつけ、そのまま、胸まで刃を振り下ろした。そして、遺体をテヴェレ河に投げ捨てたのだった。

ギヨームはギ・ダルマーニュの軍馬を引いてくると、ベルトランに与えた。一騎討ちに名乗りを上げた褒美だった。一方、主を失った敵は、もはや、抵抗のすべもない。素直に、ローマの城門を開き、ルイを正統なる君主 (seignor dreiturier) として歓迎したのだった。[58-61, 2362-2641]

<sup>\*55</sup> すでに見て来た通り、「ギヨームがルイを支えること」は、そのまま、「エムリ一族の政治的覇権を確立すること」であった。しかし、後者を前者の動機だとか、目的だというふうにして、上記二項の関係を単純化するのは、正しくない。ギヨームが、単に、政治的覇権のみを求めているのであれば、彼の最終目的は、ルイからの王位篡奪だということになってしまうだろう。しかし、上のセリフ通り、彼にはルイを裏切る意志はないし、実際、決して、裏切らないのである。

つまり、先の二項は、単純に、等式で結ばれる関係であり、ギヨームの利益はルイの利益であり、ルイの利益はギヨームの利益なのである。

### V.-3. ローマでのルイの戴冠

気高いギヨームはローマ市中にあった。彼は、大急ぎで、自分の君主の手をとると、すぐさま、彼を玉座に座らせ、フランク人臣民の王として、王冠を戴かせた。その場で、全員が臣従の誓いを述べた。その誓いをしっかりと守る者も、全く守らない者も、ルイへの臣従を誓ったのだった。<sup>\*56</sup>

Par dedenz Rome fu Guillelmes li frans ; Prent son seignor tost et isnelement, En la chaire l'assiet de maintenant, Sil corona del barnage des Frans. La lui jurerent trestuit le sairement. Tels li jura qui li tint bonement, Et tels alsì qui ne li tint neient. (L. 62, vv. 2642-2648)

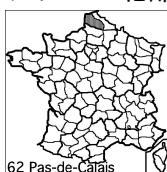
## VI. エピローグ

勇者ギヨームはローマ市中にあり、自分の君主ルイに王冠を戴かせ、帝国全体に対するルイの支配権を確立したのだった。その後、旅を計画し、準備した。一行は長らく旅路をともに進み、ついに、フランス王国に入った。そして、王はパリの町へ、ギヨームはモンルーユ＝スール＝メール (Montreuil-sur-Mer)<sup>\*57</sup>へ向けて、それぞれ、出立したのだった。

さて、ギヨームは、体を休め、森や川縁に狩りをしに行くような生活ができると思った。だが、そんなことは、彼が生きる限り、決して、実現しないだろう<sup>\*58</sup>。なぜなら、フランス人たちは王に逆らい始め、互いに戦争をしかけ、相手を蹂躪し始めたからだ。彼らは都市<sup>まち</sup>を焼き、国土を荒廃させた。ルイ王の名のもとに、相互に助け合おうなどと気持ちは、彼らにはなかったのだ。

<sup>\*56</sup> シャルルマーニュが皇帝と呼ばれるのは、ローマで戴冠し、ローマ皇帝となったからである。したがって、その後を次ぐ、ルイ王も、厳密には、ローマでの戴冠を済ませて、初めて、皇帝を名乗ることができるのである。

<sup>\*57</sup> フランス北部、パ＝ド＝カレ (Pas-de-Calais) 県の町。



<sup>\*58</sup> この短いが、作品中に繰り返し現れる表現は、巨人ギヨームが決して好戦的な人物ではなく、心から平和を望む人物だということを、よく表している。

一人の使者が、そのことを伝えると、ギヨームは正気を失わんばかりになり、ベルトランを呼んだ。「大事な私の甥よ、聞いてくれ。神の愛にかけて、お前なら、私にどんな助言をしてくれるのか。我が君主、ルイはシャルルマーニュからの相続財産をすっかり失ってしまったのだ。」ベルトランは答えた。「さあ、そんなことは放っておきなさい。フランスのことは、どうか、放っておいてください。あんな国は、悪魔に任せておけばよいのです。それから、あの王も。彼はあまりに愚かです。領地のうちのほんの一ピエ (33.4cm) 分でも、彼には、統治できないでしょう。」ギヨームは答えた。「そういう考えは、捨てるが良い。ルイ王への奉公に、私は、自分の若さをつぎ込むつもりなのだ<sup>\*59</sup>」

ギヨームは自分の家来や同盟者を招集した。一行は、馬や徒<sup>かち</sup>で全速前進し、ついに、パリの都市<sup>まち</sup>に至った。そして、その地で、ギヨームはルイを見つけ出した。今や、一大戦争が始まった。短鼻侯ギヨームは、パリの地に留まるのが不可能だと見て取った。強敵があまりに多かったのだ。そこで、守るべき幼子ルイを、ランの都市<sup>まち</sup>に移し、市内の兵にはしっかりルイを守らせる一方、市街の兵には焼き討ちと略奪を行わせた<sup>\*60</sup>

それが終わると、ギヨームは（敵の）防御柵を破り、（敵の）高い城壁を突破、破壊し始めた。そして、一年の間、敵を大いに苦しめ、十五名もの領主を宮廷におもむかせ、フランスを司るルイ王から、領地を拝領させたのだった。それから、ギヨームはルイに自分の妹<sup>めと</sup>を娶らせた。かくして、ルイも強大な一門の一人となったのである<sup>\*61</sup>。だが、ルイ王は強大になってしまうと、もはや、ギヨームに感謝しなくなったのだった。

Par dedenz Rome fu Guillelmes li ber, S'a Loois son seignor coroné :  
De tot l'empire li a fait seürté. Lors s'appareille et pense de l'errer. Tant

<sup>\*59</sup> ギヨームが、本来、平和を好む人物として描かれていることは、すでに述べた。彼が戦うのは、戦争が好きだからではなく、それが臣下としての義務だからである。彼が義務を果たすことにより、はじめて、国の平和が保たれることも、すでに、述べた通りである。

<sup>\*60</sup> 現代人には一見理解不可能な記述であろう。しかし、籠城を行う場合、周辺の民家を焼き払うのは、戦術上、重要であった。そうすることにより、攻撃の際に役立つ可燃物を、敵が入手しにくくなるからである。また、籠城する者にとって最大の問題の一つが食料不足であるのは言うまでもない。略奪は備蓄を増す一方、食料を根こそぎ奪うことで、敵が食料を調達する際の妨げともなったのである。とはいえ、戦地の周辺に住む農夫たちにとっては、とんでもない大惨事だった（33 頁も参照）。ギヨームの政治的選択・戦略的選択は、最善だとしても、それに伴う犠牲者が存在しない訳では決してなかったのである。

<sup>\*61</sup> 王と姻戚関係を結ぶことで、エムリ一族は完全に政治的覇権を確立したのである。

ont ensemble erré et cheminé Qu'il sont venu en France le regné. Vait s'en li reis a Paris la cité, Li cuens Guillelmes a Mostrel sor mer.

Or se cuida Guillelme reposer, Deduire en bos et en riviere aler ; Mais ce n'iert ja tant com puisse durer, Car li Franceis pristrent a reveler, Li uns sor l'autre guerreier et foler. Les viles ardent, le païs font guaster, Por Looïs ne se vuelent tenses.

Uns mes le vait a Guillelme conter ; Ot le li cuens, le sen cuide desver, Bertran apele : « Sire niés, entendez : Por l'amor Deu, quel conseil me donez ? Li reis mes sire est toz deseritez. » Respont Bertrans : « Car le laissez ester. Car laissons France, comandons l'a malfé, Et cestui rei, qui tant est assotez ; Ja ne tendra plein pié de l'erité. Respont Guillelmes : « Tot ce laissez ester : En son servise vueil ma jovente user. »

Il fait ses omes et ses amis mander. Tant ont par force chevalchié et erré Qu'il sont venu a Paris la cité. La a Guillelmes reis Looïs trové. Des or comencent granz guerres a mener. Quant veit Guillelmes, li marchis al Cort Nes, Qu'en cele terre ne porra demorer, Car trop i a des enemis mortels, Il prent l'enfant que il ot a garder, Si l'en porta a Loon la cité ; A cels dedenz le fait molt bien garder, Et cels defors et ardeir et preer ; Donc s'acuelte il as granz barres colper Et as halz murs percier et esfondrer. Dedenz un an les ot il si menez Que quinze contes fist a la cort aler, Et qu'il lor fist tenir lor eritez De Looïs, qui France ot a garder ; Et sa seror li fist il esposer. En grant barnage fu Looïs entrez : Quant il fu riches Guillelme n'en sot gré. (L. 63, vv. 2649-2695)





# Index

- [人名] アマルモンドゥ (Amarmonde), 30  
 [人名] アレルム (Alleme), 27  
 [人名] エムリ・ド・ナルボンヌ (Aimeri de Narbonne), 11  
 [人名] エルナイス (Hernais), 9  
 [人名] オリヴィエ (Olivier), 16  
 [人名] ガラーフル (Galafre), 13  
 [人名] ガルダン (Gualdin), 25  
 [人名] ギ・ダルマーニュ (Gui d'Almagne), 33  
 [人名] ギエラン (Guielin), 12  
 [人名] ギヨーム (Guillaume), 6  
 [人名] ゲフィエ (Guaifier), 13  
 [人名] ゴーティエ (Gautier), 26  
 [人名] コルソルト (Corsolt), 13  
 [人名] サヴァリ (Savari), 25  
 [人名] シャルルマーニュ (Charlesmagne), 6  
 [人名] ジュリアン (Julien), 30  
 [人名] ダゴバール (Dagobert), 30  
 [人名] ベルトラン (Bertran), 10  
 [人名] ベルナル・ド・ブリュバン (Bernard de Bruabant), 11  
 [人名] リシャール (Richard), 24  
 [人名] ルイ (Louis), 6  
 [人名] ロラン (Roland), 16  
 [地名] アナドール (Annadore), 30  
 [地名] エックス (Aix), 7  
 [地名] オルレアン (Orléans), 9  
 [地名] カルタージュ (Cartage), 30  
 [地名] コタンタン半島 (Cotentin), 31  
 [地名] サン＝ドニ (Saint-Denis), 35  
 [地名] サン＝ジル (Saint-Gilles), 30  
 [地名] シャプル (Chapres), 13  
 [地名] ジロンド川 (la Gironde), 8  
 [地名] テヴェレ河 (Tibre), 23  
 [地名] トゥール (Tours), 25  
 [地名] ピエルラートゥ (Pierrelate), 30  
 [地名] フランス (France), 6  
 [地名] ボルドー (Bordeaux), 29  
 [地名] ポワティエ (Poitier), 29  
 [地名] モン＝サン＝ミシェル (Mont-Saint-Michel), 31  
 [地名] モントルーユ＝スュール＝メール (Montreuil-sur-Mer), 37  
 [地名] ルーアン (Rouan), 24  
 [その他] アリオン号 (Alion), 17  
 [その他] サン・マルタン修道院 (Monastère de Saint-Martin), 25  
 [その他] 十二人衆 (les douze pairs), 16  
 [その他] ジョワユーズ (Joyeuse), 20, 36  
 [その他] モン・ジョワ (Monjoie), 28



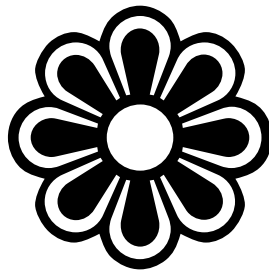






Collection Geste Francor

Couronnement de Louis  
ルイの戴冠



Numéro I-2

作者不詳 (Anonyme) · 小栗栖等編





## Collection Geste Francor について

本叢書(コレクション・ジェスト・フランコール)は主に未邦訳の中世フランス文学作品を紹介することを目的にしています。翻訳ではなく、原典に基づいた要約だということにご注意ください。とはいえ、単にあらすじを追った要約ではなく、できる限り、原典の雰囲気や尊重し、読み物として楽しめるようにしたつもりです。また、重要な部分は、対訳形式になっています。

作品を全訳するのは要約よりもずっと大変な仕事ですが、中世フランス文学にあまり馴染みのない読者に全訳を読んでもらうことには、デメリットも少なくありません。「傑作」の誉れ高い『ロランの歌』でさえ、初心者には相当手強いようです。文学に造詣の深い私の友人さえ、この作品の通読を放棄してしまったほどです。

中世の文学作品は、ある程度時代背景を知っていないと読みづらいものです。それに、作品同士の関係が密で、作品をある程度読みためないと本当の面白さが見えてきません。端的に言えば、敷居が高いのです。ただ、その敷居を一旦越えてしまえば、向こう側には豊穡な虚構世界が広がっています。

上記のことを踏まえて、編者は、エネルギーを、作品の全訳ではなく、別の方向に向けることにしました。それは第一に、できる限り詳しい注釈を加える

ことです。私が大学で教える学生のほとんどは中世フランス文学はおろか、小説も読まないようです。そういった学生も読んでくれたらな、という一抹の期待をこめて、言わずもがなの注釈もずいぶんつけました。第二に、できる限りたくさん作品を収録することにしました。そうすることで、個々の作品が融合し、一つの虚構世界を形作る様子を表現できたら、と考えたのです。中世フランス文学の傑作の多くが日本語で読めるようになった今や、こうした試みも許されるのではないかと思います。本叢書によって興味を引かれ、全訳、あるいはフランス語現代語訳、そして、原典の新たな読者が生まれてくれたら、编者としては、これほどうれしいことはありません。

とはいえ、もう一方で、本叢書がもう少し野心的だということもまた、明瞭でしょう。中世フランス語の原文や固有名索引を付したのは、一応、専門家の卵のことを念頭においたからです。特に武勲詩は、現在のところ、『ロランの歌』と『ギヨームの歌』にしか日本語訳がありません。ロマンや叙情詩を専門にしようとする学生、中世仏文学で卒論を書こうとするには、手っ取り早い入門書として本叢書が役立つのではないかと思います。

编者 小栗栖等

# Collection Geste Francor

## I 武勲詩

I-1 『ギヨームの少年時代 (Enfances Guillaume)』

I-2 『ルイの戴冠 (Couronnement de Louis)』

I-3 『ニームの荷車隊 (Charroi de Nîmes)』

I-4 『オランジュの陥落 (Prise d'Orange)』

I-5 『アリスカン (Aliscans)』

I-6 『ギヨームの出家 (Moniage Guillaume)』

## II ロマン (クレティアン・ド・トロワ)

II-1 『エレックとエニド (Erec et Enide)』

## III ロマン (古代物語)

III-1 『テーベ物語 (Roman de Thèbes)』

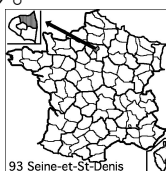
## 凡例

### 略号

L.	詩節 (Laisse) : LL. は複数
v.	詩行 (vers) : vv. は複数
[古仏]	古フランス語 (Ancien français)
[現仏]	現代フランス語 (Français contemporain)
[羅語]	ラテン語

### 注意事項

- 章や節は、編者が、読者の便宜をはかって、付したものであり、写本や校訂本に基づいたものではない。
- 特に断らない限り、引用は「」で括るか、小活字で独立した段落として提示する。
- 県名に対しては、小さなフランス地図を付し、その位置を示した。これには、小栗栖の開発した RegDepFrn パッケージを使用した (HP 上で公開している)。



93 Seine-et-Marne



84 Vaucluse